

ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題 ーインタビュー調査からー

丸山 啓史

Educational Challenges Related to Vegetarians and Vegans in Japan

Keishi MARUYAMA

Accepted November 15, 2024

抄録：ベジタリアン／ビーガンを対象とするインタビュー調査をもとに、日本の社会のなかでのベジタリアン／ビーガンの経験を把握し、ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を示した。第一に、畜産や環境問題や動物倫理などに関する情報・知識を学習者に保障していくことが、今後の学校教育の課題であると考えられた。第二に、ベジタリアン／ビーガンについての情報・知識の普及など、ベジタリアン／ビーガンに対する理解を社会のなかに形成していく取り組みの必要性が示唆された。第三に、学校生活に関しては、高校や大学の食堂におけるベジタリアン／ビーガンへの対応、日常の給食や行事の際の食事に関するベジタリアン／ビーガンへの対応、食すること以外をめぐる問題への対応が、今後の課題として確認された。

索引語：ベジタリアン、ビーガン、多様性、食事、インタビュー

Abstract: Vegetarianism and veganism as lifestyle choices are becoming increasingly popular worldwide. However, studies examining the motivation and ethical basis for such practices are limited. This study aimed to examine the experiences of vegetarians/vegans in Japanese society and identify the educational challenges related to such individuals. Interviews with 8 vegetarians and vegans were conducted. Findings revealed the following points. First, schools should promote awareness about certain key issues, such as animal farming, environmental crisis, and animal ethics. Second, an understanding of vegetarians/vegans in society must be promoted by disseminating information and knowledge about them. Third, in terms of school life, the inclusion of vegetarian/vegan meals at high school and university cafeterias as well as consideration of aspects other than food is essential. The study findings have important implications for policymakers, practitioners, students, and researchers.

Key Words: vegetarian, vegan, diversity, diet, interview survey

1. 問題の所在

近年の日本においては、ベジタリアン／ビーガンの存在についての社会的認知が進みつつあるようだ。ベジタリアン／ビーガンを主題とする書籍の刊行も珍しくはない（森，2023、井上，2023、鶴田ら，2024、など）。

しかし、ベジタリアン／ビーガンの経験を整理して把握する研究は、日本では極めて少ない。角田（2011）が「近親者からの干渉」に着目してベジタリアンを対象とするインタビュー調査を行っており、古瀬（2022）が「消費者間の相互作用」に着目してビーガンを対象とするインタビュー調査を行っているものの、ベジタリアン／ビーガンに関する研究は限られたものになっている。

教育に関する研究のなかでも、ベジタリアン／ビーガンの存在が注目されることは皆無に近い¹⁾。人間以外の動物と人間との関係が教育の領域で問われるのは、動物介在教育の文脈などに限られる（谷田・木場，2014、など）。人間の成長・発達にとっての効果という観点から動物と人間の関わりが問題にされることはあるものの（中島，2015、濱野，2020、大塚，2023、など）、ベジタリアン／ビーガンの存在に着目して教育の課題が検討されることはほとんどない²⁾。動物園や水族館が関与する教育についての議論においても、そうした教育とベジタリアン／ビーガンとの関係は取り上げられにくい（朝岡編，2023、など）。

ベジタリアン／ビーガンは日本の教育の領域においてマイノリティであるが、マイノリティの教育をめぐる議論や研究のなかでも、ベジタリアン／ビーガンの存在は視野の外に置かれることが多い³⁾。障害のある子ども、外国につながる子ども、性的マイノリティである子どもの存在が社会的に注目される一方で、ベジタリアン／ビーガンである子どもの存在は社会的に注目されていない。教育の場における「食マイノリティ」に関する議論や研究をみても、食物アレルギーや宗教を理由とする「食マイノリティ」に対する着目はみられるものの、ベジタリアン／ビーガンへの関心は薄い（山ノ内・四方，2021）。ベジタリアン／ビーガンである子どもや保護者の存在、ベジタリアン／ビーガンである人の存在は、教育をめぐる議論や研究のなかで置き去りにされている。

また、動物倫理に関する議論、「動物の権利」に関する議論、ビーガニズムに関する議論のなかでも、教育をめぐる問題は重視されていない。浅野（2021）や田上（2021）は、動物倫理に関して全般的な議論を展開しているが、教育をめぐる問題を取り立てて論じてはいない。井上（2022）も、批判的動物研究（Critical Animal Studies）を推進する立場から動物倫理をめぐる議論の展開を幅広く検討しているが、直接的に教育のあり方を問うような記述はほとんど行っていない。なかの（2024）は、学校における動物解剖実習に言及しているものの、教育に強い関心を向けてはいない。

そこで、本研究では、ベジタリアン／ビーガンを対象とするインタビュー調査をもとに、日本の社会のなかでのベジタリアン／ビーガンの経験を把握し、ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を示す。本研究だけで教育の課題を網羅的に明らかにすることはできないものの、ベジタリアン／ビーガンに関する研究が極めて少ない現状において、ベジタリアン／ビーガンである当事者の語りをもとに教育の課題を明らかにしていくことは重要である。

なお、本研究では、「ベジタリアン」と「ビーガン」を明確には区別していない。なるべく動

物性のものを食べないようにしている人を「ベジタリアン／ビーガン」として考えている。「ときどきは動物性のものを食べる」「状況によっては動物性のものを食べる」「種類によっては動物性のものを食べる」といった人も、「ベジタリアン／ビーガン」に含めている。

さらに付け加えると、人間による動物の搾取や虐待をなくしていこうとする思想や実践の総体がビーガニズムなのであるから、食生活の面だけで「ビーガン」を考えることは必ずしも妥当ではない。しかし、本研究では、さしあたり食生活に焦点を当てて、ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を探る。

2. 方法

2024年2月から2024年8月にかけて、ベジタリアン／ビーガンである8名の協力を得て、個別に、対面による半構造化インタビューを実施した。

協力者の年齢は、表1に示した通りである。ベジタリアン／ビーガンをめぐる学校教育の課題を探ることが本研究の重要な部分であるため、近年まで学校教育を経験してきた20代の人と子育て中の人とが協力者の中心になっている。インタビューを実施した時点において、Eさんには、6歳と3歳の子どもがいた。また、Hさんには、高校を卒業したばかりの子どもと高校生の子どもがいた。

インタビューにおける質問内容は、ベジタリアン／ビーガンになった経緯、家庭生活における困りごと、社会生活における困りごと、学校生活における困りごと、などである。

それぞれの協力者とのインタビューに要した時間は、表1に示した通りである。

インタビューの内容は、協力者の了承を得たうえで、ICレコーダーによって録音した。本研究では、その録音をもとに、インタビュー調査の結果を整理し、考察を行っている。以下の記述においては、協力者の発言を鉤括弧内に記し、必要な補足を丸括弧内に記す。

なお、協力者への依頼にあたっては、AさんにHさんを紹介してもらい、BさんにCさんを紹介してもらい、CさんにEさんを紹介してもらい、FさんにGさんを紹介してもらった。

表1 協力者の年齢とインタビュー時間

協力者	年齢	インタビュー時間
Aさん	20代前半	約1時間12分
Bさん	20代前半	約1時間11分
Cさん	20代前半	約1時間10分
Dさん	20代前半	約1時間12分
Eさん	20代後半	約1時間11分
Fさん	30代前半	約1時間09分
Gさん	40代後半	約0時間58分
Hさん	50代前半	約1時間57分

3. 結果と考察

(1) ベジタリアン／ビーガンになる契機

インタビューにおいては、ベジタリアン／ビーガンになった経緯を話してもらった。

Aさんは、摂食障害を経験したことをきっかけに、『完全に今日からビーガン』とかじゃなくて、『気づいたらあんまり食べてへんな』みたいな感じで、ビーガンに移行した。16歳のときに「(ビーガンという)ライフスタイルを知って」、17歳のときには「完全に(ビーガンに)なって」いた。

Bさんは、大学の授業でファストファッションについて考えたことをきっかけに、「もっと犠牲にしているものがあると思って」化粧品について調べるなかで、動物実験の問題を知った。そして、「動物実験の動画」を探すなかで、工場畜産の動画を目にすることになった。「こんなひどいことが当たり前に行われてるのに、自分は命を殺して食べてるのはわかってたけど、見ないようにしてたのを見たから、やめたほうがいいし、食べれないと思ってやめた」と、Bさんは語っている。

Cさんは、高等学校卒業後にカナダに留学し、住民の「だいたい30%ぐらい」がビーガンであるという町で生活をした。その時期に、エコツーリズムについて学んだり、オーストラリアの山火事のニュースに触れたりするなかで、「もともと環境問題は関心があった」が、「自分にできること、全部やりたい」と思ったという。牛肉が温室効果ガスの排出につながっていることを知り、「もうその日から、牛肉食べないって決めて」いる。そして、「ビーガンの子が学校に何人かいて、存在は知ってたので、いろいろ調べてたら(中略)3日くらいでアニマルライツまでたどりついて」、ビーガンとしての生活を始めることになった。

Dさんは、「子どもの頃から、動物を食べてるっていうことに、すごいモヤモヤしているというか、居心地の悪さを感じて」いたという。「大学1年生ぐらいのとき」に、動物倫理に関する本を読み、「居心地の悪さみたいなものがずっとあったのを(中略)言葉にしてくれてるみたいな感覚」を抱くとともに、「世界でベジタリアン／ビーガンが増えて、関心が高まって」いることを知り、「自分もベジタリアン／ビーガンを始めてみよう」と考えた。「少しずつお肉を減らして行って、お肉を食べなくなると、魚を減らし始めて、魚も食べなくなると、卵もミルクも」摂らなくなると、ビーガンになった。

Eさんは、雑誌で「サステナブル」に関する特集がされていたのを読んで、「服であつたり、いろいろ大量生産・大量消費・大量廃棄みたいな時代ってのを知って、『え〜、なんちゅう環境に悪いことをしてんねや』って」思った。そして、「環境問題から入って、そこからどんどんビーガンにつながってく」ことになった。「ある日、インスタを登録して」、関心のあることを検索していると、「検索するやつからどんどん関連づけてる、おすすめみたいな出てくる」ため、「ビーガンの動画とか、発信してる方の発言とかを知って、けっこう衝撃で」、「わりとすぐに『食べんとこ』って」思った。環境問題を知るなかで「フレキシタリアンに初めはなってた」ものの、ビーガンに移行することになった。

Fさんは、中学生から大学生にかけての時期をカナダで過ごしている。大学生のときに歯の矯正を進めたところ、肉が歯の間に詰まりやすくなり、「めっちゃ気持ち悪くて」、「全部野菜にしたほうが楽」だったことから、肉を食べなくなった。もともと肉が好きではなかったが、歯

の矯正をして以降は「肉のおいしさがわからなくなって」、ベジタリアン／ビーガンが続けている。「どんな店でも絶対ベジタリアンメニューがある」という町で暮らしていたこともあり、「楽しくて、ベジタリアンになった」という。ベジタリアン／ビーガンになった理由は、「動物倫理とか、ほかの宗教的な考え」からではない。

Gさんは、「15年くらい前」から「1年に1回くらい断食をして体を整えるっていう習慣」があり、「断食」の始まりや終わりの時期には動物性のものを食べない生活をしていた。その「断食」がきっかけで、「7、8年くらい前」に「肉いらないんじゃないかな」と思って、ビーガンに移行した。

Hさんの場合は、「娘が先にビーガン」になっていた。娘は、5歳のときにテレビ番組で牛の搾乳をする場面を観てから牛乳を飲まなくなり、小学生のときに卵や肉も食べなくなった。Hさん自身は、「コロナ禍ですごく時間ができたとき」に、外国のドキュメンタリー映画で「畜産の裏側みたいなの」を観たことで、ビーガンに移行している。『命をいただいてる』と言うには程遠い環境の映画を何本か観て、「自分の価値観みたいなのが、が～んて壊されて」、夫に「ビーガンになろうと思います」と話したという。

以上のように、協力者がベジタリアン／ビーガンになった契機はさまざまである。環境問題への関心の高まりが契機になっている例もあれば、動物倫理について学んだことが契機になっている例もあり、摂食障害が契機になっている例、歯列矯正が契機になっている例、「断食」が契機になっている例もある。また、本を読んだことが契機になっている場合もあれば、動画を観たこと、ドキュメンタリー映画を観たことが契機になっている場合もある。

ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を考えるうえで注目されるのは、学校教育が直接的な契機となってベジタリアン／ビーガンに移行している例がみられないことである。Bさんは大学の授業を間接的な契機としてベジタリアン／ビーガンになっているものの、Bさんがベジタリアン／ビーガンになった直接の契機は、動物実験について調べるなかで工場畜産の実態に触れたことである。

協力者がベジタリアン／ビーガンに移行する理由となった情報・知識を伝えることに、学校教育は失敗してきたのかもしれない。Aさんが言う「ライフスタイル」の一つとしてベジタリアン／ビーガンの生活があること、BさんやHさんが目にしたような畜産の実態、CさんやEさんが言及しているような環境問題と肉食や畜産との関係、Dさんが学んだような動物倫理の考え方などを、学校教育は十分に伝えられていないようである。

自らの生活を左右するような重要な情報・知識が学習者に保障されないことは問題であろう。被畜産動物の実態や畜産の環境負荷などについて知る機会を十分に確保することが、学校教育の今後の課題ではないだろうか。

(2) ベジタリアン／ビーガンに対する周囲の反応

1) 家族の否定的態度

インタビューにおいては、ベジタリアン／ビーガンであることに対する家族の反応を話してもらった。

ベジタリアン／ビーガンは、ベジタリアン／ビーガンではない近親者との間に対立を抱えてしまうことがある（ジョイ，2023）。角田（2011）も、ベジタリアンを対象とするインタビュー

調査をもとに、ベジタリアンとしての食生活や考え方に関して近親者からの干渉や批判を受けたことのある人が多いことを示している。

もちろん、ベジタリアン／ビーガンであることに対して、ベジタリアン／ビーガンではない家族が必ず否定的態度を向けるわけではない。

たとえば、Dさんは、ベジタリアン／ビーガンになったことを親に伝えているが、親の反応は、「わりとすんなり、そんな問題なく、『あ、そうか。食べなくなったか』」といったものだったという。親は、「ビーガンのインスタントのカレールー買ってくれたり」している。

また、Eさんの場合は、夫と2人の子どもがいるが、家族4人全員がビーガンとしての食生活を送っている。Eさんが『「私、もう今日から食べへん』みたいな感じで」夫に話したところ、「最初はもちろん変な目で見られて、『俺は食べるで』って感じやった」ものの、「1週間後くらい」に夫は『「俺ももう食べへんわ』みたいな感じになって」、それからはEさんも夫もビーガンが続けている。そして、Eさんの親は、自身は「全然ビーガンとは無縁」であり、「腑に落ちへん」ようなところが見受けられはするものの、Eさんが「遊びに行ったときは、野菜だけのご飯を作ってくれたり」するし、「大豆ミート（中略）買ってくれたり」もする。

しかし、ベジタリアン／ビーガンであることに対して、家族から否定的態度を示されてきた人も少なくない。

たとえば、Aさんは、両親や妹と暮らしているが、「全然、親は、興味関心なく、反自然派な感じ」だという。Aさんが作るビーガン料理を家族は嫌っており、『「おいしくない』とか『味気ない』とか』言われている。ベジタリアン／ビーガンであることなどについて、Aさんは「理由を言って理解してもらおうとした」ものの、『「地球の温暖化が進んで』とか言っても、『今いいから、いいねん』みたいな」態度を親から向けられてきたという。Aさんは、家族に対して、「理解してくれない」という思いを抱いている。

Bさんの場合は、「同居してる家族だけは理解してる。でも、それ以外の家族は理解はしてない」という状態だという。Bさんは、いっしょに夕食を食べることの多い親戚に関して、「いろいろ肉系のおかずも出てくる家で、『食べたくない』みたいなこと言ったら、『え〜』みたいな、『でもいつか食べたくなるから』みたいな諭され方をして、わかってくれへんというか、『いつか大丈夫になるから』みたいな感じなのが、『あれっ』って思いました」と述べており、「夕方に行って、夕ご飯をいっしょに食べるんで、そのときに、絶対、肉か魚のメインが出てきて、それがけっこう肉の割合が高いんで、『あっ』と思って、でも、しょうがないっていうか、作ってくれたし、説明する気もあんまり起こらないんで食べる、みたいな感じですね」と語っている。

Cさんは、ベジタリアン／ビーガンであることに関して、妹の理解は得られているが、両親の理解は得られていない。妹は、「お肉が好き」で、「自分は（食生活を）変える必要はないと思ってる」ものの、Cさんがベジタリアン／ビーガンであることについて「理解はしてくれて」おり、「いっしょに遊びに行くときとかは、けっこうビーガンのお店を選んでくれたりしてる」。しかし、両親は、Cさんがベジタリアン／ビーガンであることに理解を示していない。カナダ留学を終えて日本に戻ってきたCさんがビーガンを続けようとする、「これ食べれないみたいなこと言ったときに、『そんなバカなことやってんじゃない』みたいな感じで、（親に）怒られた」という。『「変な宗教なんじゃないの』とか、そういう価値観を（親から）ぶつけられたっていうトラウマ』があると、Cさんは話している。

Fさんの両親も、Fさんがベジタリアン／ビーガンであることを快く思っていないようである。両親は、肉を食べないのは不健康だと考えており、Fさんの体調を心配していた。また、Fさんは、両親から「変な宗教に入ったんじゃないですか」という態度を向けられたこともある。Fさんは、両親について、「今はあきらめたけど、最初のときは、（両親が）すごく怒ってました」と話している⁴⁾。

Gさんも、両親による受けとめに関しては、「なかなか通じないよなあ」という感覚を抱いている。Gさんが「肉、食べなくなったんだよね」と両親に話したところ、『肉食わずに、何食うの』みたいな、『体に悪い』くらいの感じのこと』を言われたという。

Hさんは、自身がベジタリアン／ビーガンであることに対する家族の否定的態度については語っていないものの、娘が牛乳を飲まなくなったことに関しては、「義理のお父さん、お母さん」から「アレルギーでもないのに飲ませないのはおかしくないか」「これも食べられないし、あれも食べられないじゃん、かわいそう」といった態度が示されたことを語っている⁵⁾。また、娘が牛乳を飲まなくなった当初は、Hさん自身が、「子どもにさせないと、親の役目が果たせない」というような思いから、「あれ飲まなかったら背も高くなれないし、アイスクリームとかヨーグルトとか、いつも食べてるものが食べられないよって言って、脅す」ことをしてしまっていたという。

以上のように、内容の差や程度の差はあるものの、ベジタリアン／ビーガンではない家族との関係において葛藤や衝突を経験している人は少なくない。角田（2011）の調査から約15年が経過しているものの、ベジタリアン／ビーガンが家族から否定的態度を向けられがちな状況はそれほど変化していないのかもしれない。

否定的態度が生じる要因はさまざまだと考えられるものの、CさんやFさんの語りに「変な宗教」という語が出てきているように、ベジタリアン／ビーガンに対する誤解や偏見が否定的態度の背景に存在していることは少なくないようである。

そうであるならば、教育の課題としては、ベジタリアン／ビーガンについての情報・知識の普及や、ベジタリアン／ビーガンについての妥当な認識の形成が挙げられよう。ベジタリアン／ビーガンに関する啓発も求められるのではないだろうか。学校教育の課題としてだけでなく、社会教育の課題としても、ベジタリアン／ビーガンについての意識向上を考える必要があろう。

2) 社会のなかに存在する否定的態度

ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度が、日本の社会のなかに存在している。

Aさんは、「ビーガンは嫌いっていう方はけっこういますね」と述べ、「ビーガンの団体みたいなのがあって、団体の方がけっこう宗教的で、（中略）そういう方が目立ちちゃうんですね。普通の人たちは、その方たちだけを知って、ビーガンて、こんな団体みたいな、こんな宗教的なんやっていうイメージがあって、（中略）ちょっと否定的なイメージもたれたりとか」と話している。

Cさんは、自分がベジタリアン／ビーガンであることを「友だちとかに言いづらい」と述べている。「海外かぶれとか、そんなことと結び付けられるんじゃないかなと、ちょっと恐怖心」があるという。「高校までの友だちというか、地元の友だちには一人も言えてなくて」という状況である。Cさんは、「（ビーガンが）すごくマイノリティっていうのもあるし、なんか風当たり強いんじゃないかっていう（中略）そういう恐怖感がすごくある」とも語っている⁶⁾。

Gさんは、ビーガンについて「変な人認定されがちじゃないですか（笑）」と話している。自身がベジタリアン／ビーガンであることを「あんまり職場では言っていない」という。Gさんは、「言う」と、『何あの人、なんか変な人』って」思われるかもしれないという意識をもっている。『普通と違うぞ、この人』って、なるべく思われぬように、職場のなかではそっと生きていたいって思ってるかもしれません」と、Gさんは語っている⁷⁾。

ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度が社会のなかに存在しているという意識から、CさんやGさんの語りからうかがえるように、自身がベジタリアン／ビーガンであることを周囲の人に言うのが難しくなっている人もいる⁸⁾。

そして、自身がベジタリアン／ビーガンであることを周囲の人に伝えている人であっても、ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度が社会のなかに存在すると感じていることがある。

たとえば、Bさんは、自分がベジタリアン／ビーガンであることを数人の友人に話しており、「たいして反応されたわけじゃなくて」、「ふうん、みたいな感じ」だったという。しかし、「友だちに『ビーガンになりたい』ってなことを言ったときに、その子に『宗教やと思ってた』って言われて、（中略）『宗教やと思ってたんや』と思って（中略）びっくりしました」とも話している。Bさんは、ベジタリアン／ビーガンについて「マイナスな部分に目を向けてる記事が意外と出回ったり」することを気にかけしており、「未知のものだから、みんな怖いから、負の側面だけを見つけて、とにかくそれだけをすごくたたくみたいな」ことがあると感じている。

Eさんは、「ほんまに友だちに恵まれてるなあ。否定的なこと言われたことない」と話しながらも、ベジタリアン／ビーガンになって友人が離れていったという例は「すごい聞きます」と述べており、「変人扱いされるじゃないですか。みんなと違うし。食べてへんだけで」と語っている。

Hさんは、ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度に関して、「4年間ビーガンとして発信してきて、否定されたことって、1回もないんです」と語りながらも、「めっちゃ言われてる人は言われてる」と述べ、「ビーガンで特殊な人なんだと思われてる」とも話している。

また、ベジタリアン／ビーガンに対しての否定的な表現をインターネット上で目にしている人もいる⁹⁾。

Cさんは、「ネットとかで『ビーガン』で検索したときに、かなり過激なコメントとか見ることがよくあって」と、ベジタリアン／ビーガンに対して否定的な言論があることを意識している。

Bさんは、「ビーガンの人の前で肉を食べて」いる動画、「ビーガンの人がこんな行動をしてめっちゃ変」というような動画に言及しながら、「インスタとかYouTubeとかで、ちょっとした動画で回ってくる」と話し、「きついなあと思って観てました」と述べ、「冷たい視線が投げられてるような気がして、それも受けないといけない、みたいな感覚があるんでしんどい」と語っている。

Eさんは、インターネット上の「コメント欄」に関して、「私は全然ほっといてますけど。言わせとけばいいじゃん」と述べながらも、「コメント欄、すごいですよね」と話し、「どうせ肉食べたいんだろ」「感謝していただければいいじゃん」といった記述が「コメント欄」に見られることに言及している。

ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度が社会のなかに存在することを感じ取っている人は少なくないようである¹⁰⁾。否定的態度の存在によってベジタリアン／ビーガンが生きづら

さを抱えること、ベジタリアン／ビーガンとして生活する自由が阻害されることは、見過ごすべきではない問題であろう。

3) 社会のなかにある無理解など

ベジタリアン／ビーガンに対する批判的態度や攻撃的態度には至らなくても、ベジタリアン／ビーガンに対する無理解がベジタリアン／ビーガンを困らせることもある。

たとえば、ベジタリアン／ビーガンの食生活が栄養面から見て不健康であるという意識を周囲の人がもっていることは、ベジタリアン／ビーガンを困惑させかねない¹¹⁾。Aさんは、「ビーガンが栄養的にも悪いとかって言われるけど、あんまり言わんといてほしいなっていうふうに思います」と語っている。

また、ベジタリアン／ビーガンの存在を想定しない言動も、ベジタリアン／ビーガンを困惑させることがある。少し前に新しい仕事を始めたCさんは、「いっしょに働いてる人たちが、けっこう年配の方で、すごくかわいがってもらえてるぶん、(お菓子など) いろんな物を買ってくる」ことで、「今は葛藤中」という状況になっている。また、Cさんは、シェアハウスに入居する際、「大家さん」から「歓迎会開く」と言われ、『好きな食べものある?』というときに、すごく困った」という。「お肉だけは食べられない」と伝えたものの、「後はもう、やっていただく身だから、何も言えな」かった。

ベジタリアン／ビーガンに対する無理解が社会のなかに少なからず存在している状況は、場合によっては、ベジタリアン／ビーガンの職業選択を制約するかもしれない。Dさんは、「自分のストレスを考えて、ビーガンに理解のないところで働くのは、絶対続かないなあと思う」と述べており、「あらかじめ、ある程度、理解があるっていうのがわかったところで働こうと思っています」と語っている¹²⁾。

ベジタリアン／ビーガンに対する理解を社会のなかに形成していくことが、教育の課題として考えられるのではないだろうか¹³⁾。

(3) 学校生活のなかでの困難

1) 高校や大学の食堂をめぐる問題

学校生活に関しては、インタビューにおいて、高校や大学の食堂をめぐる問題が語られている。

Aさんは、高校生活に関して「学校はもう、給食じゃなくて、お弁当持参か学食なので、いつもお弁当持参してっていう感じだったので、ほとんど困ることはなかった」と述べながらも、「学食でベジタリアン用とかがないので、それがあつたらうれしいなあと思います。高校も、大学も」と語っている¹⁴⁾。

Bさんは、大学の食堂に関して、「学食って、(中略) ビュッフェのところもあるけど、うちのところは定食なんです。定食のメインと言え、魚か肉。だから定食はずっと食べれなくて、ぎりぎりの苦渋の決断で『うどん』みたいな感じのことをしてた」と語っており、「めっちゃ戸惑っていた時期がありました」と述べている。そして、「野菜炒め定食とかあってもいい気がするんですけど、ないんですよ」と話しながら、「ビーガン対応のレシピがあつたらいいなと思ったんですけど、それはなくても、ほんとに野菜炒めみたいな(中略) 選択肢のものも普通にあっても、ヘルシーやし、いいなあ」と語っている。

Cさんは、通っていた大学の食堂に関して、「学食とかでの自由がまったくない」と述べており、

「今日みんなで学食行こうよとか、安い学食も行きなかった」と話している¹⁵⁾。「留学生がすごく多い学校にも関わらず、学食でまったくそういう配慮がなくて、そこはなんか、どうなのか、みたいなのはありますね」と、Cさんは語っている。

Dさんが通う大学では、食堂でビーガンメニューが提供されていたこともあったものの、現在は提供されなくなっているという。食堂におけるビーガンメニューの提供に関して、「何度かメールして、けど何度も断られるみたいなこと」を、Dさんは経験している。

大学院生であるFさんは、在籍している大学には複数の食堂がありながら、ビーガンメニューを用意している食堂は1か所だけであることに言及している。そして、そのビーガンメニューも「お惣菜一種類だけ」であることへの不満を語っている。大学の食堂を活用することは難しいため、Fさんは、「自分でもってきたり」、大学付近でビーガンメニューのある店に行ったりして、食事をしている。

以上のように、高校や大学の食堂に関して不自由さを感じている人が少なくない。食堂の活用が難しいことは、単に食事の場が限定されるということにとどまらず、友人などと食事をもにできる機会の制約につながる可能性があるため、人間関係にも影響を及ぼしかねない¹⁶⁾。

ベジタリアン／ビーガンに対応するメニューの提供を大学の食堂に求める取り組みが散見されるが（森，2023、など）、そうした取り組みの広がりが求められよう。

教育に関する研究においても、高校や大学の食堂におけるベジタリアン／ビーガンの包摂についての検討が進められなければならない。持丸ら（2023）は、「多様性対応」の観点から、大学の食堂におけるハラルメニューの提供に関する検討を行っている。このような議論や研究の流れのなかに、ベジタリアン／ビーガンの存在を位置づけていくことが必要である。

2) 給食をめぐる問題

保育施設や小学校・中学校に子どもを通わせてきた人からは、給食をめぐる問題が語られている。

Eさんは、保育園に通う子どものために、毎日のようにお弁当を作っていた¹⁷⁾。「2年半かな、お弁当を作り続けました」と話している。お弁当は、ほかの子どもと同じ皿に「移し替えてもらうスタイル」で、Eさんは、「お味噌汁とかも、今日の献立通りに作る」といったことをしていた¹⁸⁾。

Eさんの「下の子」は、保育園から「給食じゃないとあかん」と言われて、「家では完全にビーガン」だったものの、給食では「お魚とか食べ」ることになった。「乳と卵」については、「アレルギーの証明書」を保育園に提出することで、「アレルギーで除去、ということ」になった¹⁹⁾。

Hさんは、学校給食に出される牛乳に関して、小学校に入る娘が「飲みたくないって言った」ことから、医師による診断書を用意することになり、「乳糖不耐症っていうことで、（診断書）出してもらった」という。娘が中学校に入るときにも、「診断書を出し直し」ている。また、卵や肉も食べなくなっていた娘のために、「（給食の）代替でおかずを持たせ」ことをしており、「フライドチキンですとかだったら、お豆腐で唐揚げみたいに作ってみたり」していた。

以上のようなEさんとHさんの語りからうかがえるのは、食物アレルギー等の疾患が理由でなければ給食についての配慮・調整が行われにくい実態である。教育の場における給食に関して、ベジタリアニズム／ビーガニズムのような信条は、必ずしも尊重されていないようである。

また、お弁当を給食の代わりに持参することが認められても、お弁当を用意することは保護

者の負担になりがちである。Eさんは、保育園での食事についての柔軟な対応に関して「園と給食調理員さん」への感謝の気持ちを語っているものの、給食と似たお弁当を作ることにについては「大変でした」と話している。また、Hさんも、給食の代替となる「おかず」を用意することについて、「保護者は大変ですよ」と述べている。ベジタリアン／ビーガンの子どもの保護者に特別の負担を強いるのは、平等性という観点からしても、その妥当性が疑わしい。

Dさんは、学校給食に関して、「ビーガン、ベジタリアンの志向をもつ人たちにオプションを用意してほしいというのはもちろんある」と述べ、「今の社会が硬直してるから、実現可能性としては難しいんだろうけど、権利としては求めたいというのはありますね」と語っている²⁰⁾。また、Eさんは、ベジタリアン／ビーガンに対応する給食について、「その選択肢があったらいいと思いますけどね」と話している。給食のあり方を急激に変えるのは簡単ではないものの、多様な子どもの存在、多様な人の存在を認める社会の構築に向けて、教育の場における給食についても問い直しが求められよう。

3) 食事をともなう行事をめぐる問題

保育施設や学校における食事が問題になるのは、日常の食事のときだけではない。食事をともなう行事のときにも、ベジタリアン／ビーガンは、食事への対応を迫られる。

Aさんは、高校生活を振り返り、「校外学習とかもあって、バーベキューとかしたりする」こと、「そのときはやっぱり、みんなお肉とかが多い」ことを話している。「まずスーパーに行って、買い物をしてから、バーベキュー場に行くので、私、スーパーで、厚揚げとか、玉ねぎとか、私が好きなお野菜とかを買って、いっしょに行って、私は厚揚げを焼いて食べるとか、そういうので対応してましたね」と、Aさんは語っている²¹⁾。

Aさんは、高校の修学旅行についても話しており、「朝食もバイキングで（中略）自分で好きなものを取れる」こと、「商店街で自分で好きなものを取って食べるとかだったので、選べて」いたことは、肯定的にとらえている。しかし、「チキンライスの日とかもあって、そのときは半分ぐらいだけいただいて、半分は友だちにあげたかなんかして、とかいう感じでしたね。けっこう長い間（肉を）食べてなかったので、体がどんな反応するかわからないので、ちょっとだけ食べて、とかいう感じで」と語っており、修学旅行における食事への対応に苦慮していたことがうかがえる。

また、Eさんは、子どもが通ってきた保育園に関して、「年長さんとかだったら、おたのしみ会で、晩ご飯まで保育園で食べて、みんなで夜バーベキューして、花火して、めちゃ楽しいやつ、あれもお肉とかだいたい使ってるし、あれも私（代替の食べものを）全部持ってたんですけど、なんかねえ、そういう大変さはありましたね」と述べており²²⁾、「おたのしみ会後のおやつとか、そういうのも、やっぱりみんな、ポッキーとか、市販のおやつが多かったから、私は違うのを用意したり」していたと語っている。

保育施設や学校においては、食事をともなう行事の際にも、ベジタリアン／ビーガンである子どもへの配慮が求められるのではないだろうか。

4) 食べること以外をめぐる問題

学校生活においては、食事そのものの以外にも、ベジタリアン／ビーガンが対応を迫られる事柄が存在している。インタビューからは、そうしたこともうかがえる。

たとえば、学校における教育の内容が、ベジタリアン／ビーガンの信条に反する内容になっ

ていたり、ベジタリアン／ビーガンの存在に配慮しないものになっていたりする。Aさんは、大学で栄養学を学ぶなかで、「お肉は大事だよとか、牛乳（は）たんぱく質、カルシウム豊富とか、そういう話が普通に教科書に載ってる」こと、「先生は、畜産の裏側とか、卵の（問題）とかも言わはらない」ことに疑問を感じていた²³⁾。

さらに、ビーガニズムの観点からすると、牛革や羊毛でできた物品を学校で使用することも問題になる。Eさんは、「学校でいろいろそろえるやつとか、道具系、制服やったりランドセルやったり、けっこう動物性の（ものが）使われてるやつがあったりする」と述べ、「ああいうのもね、選べたら（よい）」と語っている。

また、ビーガニズムの観点からすると、動物園や水族館の存在も批判の対象になる。Eさんは、娘の遠足の行き先が動物園になっていたとき、娘が「あんなかわいそうな、狭いとこに入れられてるの見て何が楽しいねん、みたいな、そんな感じ」で、「断固として、行きたくない」という様子だったことから、動物園に行くはずの日に夫とともに仕事を休み、娘と出かけた。「動物園よりもっと楽しいところ行こう、みたいな感じで、楽しんでもました」と、Eさんは語っている²⁴⁾。

ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を考えていくうえでは、食べること以外をめぐる問題にも目を向けていくことが必要であろう。

4. まとめ

本研究では、ベジタリアン／ビーガンを対象とするインタビュー調査をもとに、日本の社会のなかでのベジタリアン／ビーガンの経験を把握し、ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を浮かび上がらせた。

第一に、学校教育が直接的な契機となってベジタリアン／ビーガンに移行している例がみられなかったことから、畜産や環境問題や動物倫理などに関する情報・知識を学習者に保障していくことが、今後の学校教育の課題であると考えられた。

第二に、ベジタリアン／ビーガンであることに対して家族から否定的態度を示されてきた人、ベジタリアン／ビーガンに対する否定的態度が社会のなかに存在するのを感じ取っている人が少なくないことがわかり、ベジタリアン／ビーガンについての情報・知識の普及など、ベジタリアン／ビーガンに対する理解を社会のなかに形成していく取り組みの必要性が示唆された。

第三に、学校生活に関しては、高校や大学の食堂においてベジタリアン／ビーガンへの対応が求められること、日常の給食や行事の際の食事に関してもベジタリアン／ビーガンへの対応が求められることが示された。また、食べること以外をめぐる課題も存在することが確認された。

ベジタリアン／ビーガンに関する研究が少ないなか、ベジタリアン／ビーガンの経験をもとに、ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題を示すことができたのは重要である。

ただし、本研究は、ベジタリアン／ビーガンをめぐる教育の課題の全体を明らかにするものではない。ベジタリアン／ビーガンと教育との関係については、さらなる検討が必要である。

たとえば、本研究において、インタビューの協力者は10代後半以降にベジタリアン／ビーガンになった人であり、ベジタリアン／ビーガンとして小学校生活や中学校生活を経験してきた当事者の語りを聞くことはできなかった。しかし、EさんやHさんの語りからもわかるように、

幼少期からベジタリアン／ビーガンである子どももいる。今後は、早い時期からベジタリアン／ビーガンとして生活してきた人の経験に着目することも必要である。

また、本研究では食生活に焦点を当てたものの、ビーガニズムの観点に立つならば、食べること以外をめぐる問題にも目を向けなければならない。日本の教育は、肉食主義（carnism）²⁵⁾や種差別主義（speciesism）を色濃く帯びている。学校教育に関して言えば、肉食主義を前提にした日常の言動、学校生活のなかでの皮革や羊毛の使用、畜産や漁業を無批判に肯定する教材、学校における動物飼育、動物園や水族館が関与する教育活動などが批判的検討の対象になる。教育の領域における肉食主義や種差別主義の浸透を浮き上がらせることも、今後の課題として考えられる。

肉食主義や種差別主義と結びついた資本主義が生態系と人間社会の危機をもたらしている現在において、ビーガニズムの観点から教育を問い直すことは、極めて重要な課題である。

注

- 1) 教育に関する研究を進める学会においても、たとえば食事をともなう懇親会が開催される際、ベジタリアン／ビーガンへの配慮がなされるとは限らない。
- 2) 人間の成長・発達のために動物を活用するという考え方は、人間による動物の搾取をなくしていこうとするビーガニズムの考え方とは相反する面をもっており、ベジタリアン／ビーガンの存在の尊重と相性が良いとは言えない。
- 3) たとえば、原田・伊藤編（2024）は、「インクルーシブな教育と社会」との関係で「マイノリティと教育」に着目しているものの、ベジタリアン／ビーガンをめぐる問題を扱っていない。
- 4) Fさんは、ベジタリアン／ビーガンになって以降、両親とともに暮らしていたときには、両親とFさんとで別々に食事を用意していた。「私が作ったものは両親はときどき食べるけど、逆は（ない）」とのことである。なお、Hさんも、自身と娘がベジタリアン／ビーガンである一方で、夫と息子はベジタリアン／ビーガンではないことから、家では2種類の食事を用意することが多い。
- 5) Hさんは、「アレルギーだったら守られてるんですよ。でも、ただ牛乳飲まないっていうと、めっちゃうちゃつかれるっていうか、わがままなやつってなる」とも語っている。
- 6) Cさんは、「ビーガンのカフェで働いてたときも、観葉植物というか、ちょっとした木がカフェの前に植えてあるんですけど、そこに生肉刺さってたことがあった」ことなどから、ベジタリアン／ビーガンに対して「風当たり強いのを実感して」いる。
- 7) Gさんは、「わかってもらおうと、たいして思っていない」とも述べている。
- 8) 自分がベジタリアン／ビーガンであることを周囲の人に伝えることが少なくない人もいる。Dさんは、「今はもう、完全にオープンですね。ビーガンだって言わないと、焼肉屋とか連れていかれかねないので（笑）。新しい関係のときは、食事をともにするような関係のときは、いつも、『ビーガンです』って真っ先に言ってますね」と語り、「言う必要のないときはしてないですけど、友人関係とか、長い付き合いになりそうなときは、言ってますね」と話して

いる。また、Fさんは、自分がベジタリアン／ビーガンであることに関して、周囲の人から否定的態度を向けられることはなく、「みんな無関心」であると感じている。「ああ、そうなんだ、みたいな」反応だと、Fさんは話している。

- 9) 一方で、SNSを活用することでベジタリアン／ビーガンどうしの交流を広げている人は少なくないようである。たとえば、Cさんは「SNSでビーガンの友だちすごいたくさんできました」と話しており、Aさんは「いっしょにお出かけとかしたりする友だちとかは、インスタとかで知り合った、同じようなことが好きな子とか、ちっちゃい頃からの友だちとかなので、お互い理解し合っていて、という感じですね」と話している。Hさんも、SNSを活用して、ベジタリアン／ビーガンに関する情報を集めたり、ベジタリアン／ビーガンの人との交流を進めたりしている。
- 10) Dさんは、現在の社会について、「圧倒的に、ベジタリアン／ビーガンになろうとする姿勢とか行動に対して冷たい社会」と語っている。
- 11) ベジタリアン／ビーガンの食生活の栄養面については、ファーガソン（2023）や仲本（2024）が総合的な解説を行っている。ベジタリアン／ビーガンの食生活が栄養面からみて不健康であると決めつけるような考えは、偏見であると言えよう。なお、大坂（2022）は、管理栄養士養成施設の学生のなかでもベジタリアン／ビーガンに関する理解が不十分である実態を示している。
- 12) Aさんのように、ベジタリアン／ビーガンであることを理由に仕事が制約されるという感覚はないと話す人もいる。Aさんは、「ただ単にライフスタイルの一つとしてビーガンがあるだけ」と語っている。
- 13) Aさんは、「そういう（ビーガンという）ライフスタイルがあるっていうこと」を「知ってもらいたい」と語っている。
- 14) Aさんは、「私の大学は、生協のコンビニがあるんですけど、そこにも買えるものがない」とも語っている。Aさんは、食品添加物にも注意を向けており、「生協のコンビニ」については、「ナッツとかも、添加物入っている」ことに言及している。Aさんは、「この2年ぐらい、生協で、たぶんボールペンしか買ってない（笑）」と話している。
- 15) Cさんは、お弁当を作って大学に持っていった。自分がベジタリアン／ビーガンであることを周囲の人に話すのに抵抗を感じていたCさんは、お弁当をきっかけにして自分の食生活を人に知られることに不安を抱いていたようである。「自分が説明すればいいんですけど、なんとなく恐怖心があって、つっこまれないかな、ばれないかな、そこも精神的に恐怖感がいつもあったというか。それが困ったかな」と語っている。
- 16) 大学等での学生生活に関しては、食事をともなう社会的交流の機会が少なからず存在していることに注意が必要である。大学院生であるFさんは、大学教員や学生が参加する食事の機会があることに触れながら、「みんな何でも食べる」ことが前提にあって「何も聞かない」という状況を述べ、「私が『ビーガンですよ』って言っても、変わらない。焼肉屋さんに行きます」と語っている。Fさんは、自らを「柔軟性のある人」と表現しており、「そんなに対応してくれなくても気にしない」と述べているものの、ベジタリアン／ビーガンである学生への配慮が十分ではない実態がうかがえる。Fさんは、大学教員と学生が参加する食事の機会に関して、学生の事情よりは大学教員の意向が優先されることにも言及している。

- 17) Eさんは、お弁当の持参を保育園の側から一度は断られている。「娘の気持ちを尊重したいだけですって園長先生に言ったら、OKしてくれました」とのことである。
- 18) 食物アレルギーのある子どもをもつ母親が学校給食に合わせて「コピー弁当」を作ることについての負担が山ノ内（2022）によって指摘されているが、ベジタリアン／ビーガンの子どもをもつ親も同様の負担を抱えている場合のあることがうかがえる。
- 19) Eさんは、「給食の調理員さんも手間ですからね」と述べつつも、「証明がないとあかんていうのは、なんでなんかなあって思いました」「証明がないと除去してもらえへんというの、ちょっともやっとしてましたね」と語っている。
- 20) 学校の給食で出される牛乳について、Dさんは、「後から気づいたんですけど、牛乳がだめで。すぐお腹痛くなるから」と話し、「牛乳を強制するのはよくないと思います」と述べている。「牛乳飲めない人もいるよねっていうのをもっと一般常識にして、オプションとしてほかのものを出すっていうのを、それぐらいのことはやってほしいですね」と、Dさんは語っている。
- 21) Aさんは、自分がベジタリアン／ビーガンであることを周囲の人に積極的には伝えていなかった。バーベキューに関しては、「自分の口から（ビーガンであることを）言わなかったので、『あ〜、私、お肉より豆腐のほうが好きやねん』とか言ってやるだけで、全然私は言おうとしなかったし、まわりの子も聞こうとしなかった。『あ〜、そうなんや』くらいで」と話している。
- 22) Eさんは、「バーベキューのメニューはこうやから、もしなんか違うの持ってこれれば」という趣旨で、保育園の「担任の先生」が「（バーベキューについて）詳細をばあって書いて」くれたことについて、「それもありがたかったですし。手間じゃないですか。ただでさえ忙しいのに。娘だけのために」と語っている。
- 23) Aさんは、「環境とかのこと考えずに、栄養面のことだけ考えてる」ことに関して、「ちょっと悲しいというか、複雑な気持ちになったりとかしますね」と語っている。
- 24) Eさんは、娘が動物園に行くことを禁止してはいない。「私は、全然、行っていいよって。動物さんがどんな顔してるか見てきたら、みたいな感じで言ってたんですけど、娘は断固として、行きたくない、そんな牢屋に入ってるって行きたくない、みたいな、そんな感じで」と、Eさんは語っている。
- 25) ジョイ（2022）は、ビーガニズムの対極にある信念体系を「カーニズム（肉食主義）」と名づけている。

参考文献

- 朝岡幸彦編（2023）『動物園と水族館の教育—SDGs・ポストコロナ社会における現在地』学文社
- 浅野幸治（2021）『ベジタリアン哲学者の動物倫理入門』ナカニシヤ出版
- 井上太一（2022）『動物倫理の最前線—批判的動物研究とは何か』人文書院
- 井上太一（2023）『今日からはじめるビーガン生活』亜紀書房
- 大坂裕子（2022）「管理栄養士養成施設学生のヴィーガンに関する認知」『駒沢女子大学研究紀要』第29号、pp.29-36

- 大塚敦子 (2023) 『動物がくれるカー教育、福祉、そして人生』 岩波書店
- ジョイ、メラニー (2022) 『私たちはなぜ、犬を愛し、豚を食べ、牛を身にまとうのかーカーニズムとは何か』 玉木麻子訳、青土社
- ジョイ、メラニー (2023) 『ヴィーガンとノンヴィーガンのためのコミュニケーションガイドブック』 玉木麻子訳、青土社
- 角田尚子 (2011) 「ベジタリアンを取り巻く日本の状況ー食育思想と近親者からの干渉」『佛教大学大学院紀要 社会学研究科篇』第 39 号、pp.19-36
- 田上孝一 (2021) 『はじめての動物倫理学』 集英社
- 谷田創・木場有紀 (2014) 『保育者と教師のための動物介在教育入門』 岩波書店
- 鶴田静・垣本充・加藤裕子・仲本桂子・山形謙二・いけやれいこ・中川雅博・宮城智央・橋本晃一・高井明德 (2024) 『まるごと解説 ベジタリアン&ヴィーガンの世界』 福音社
- 中島由佳 (2015) 『ひとと動物の絆の心理学』 ナカニシヤ出版
- なかのまきこ (2024) 「実験動物・展示動物・野生動物・震災と動物」 生田武志・山下耕平編『10代に届けたい 5 つの “授業”』 大月書店、pp.209-234
- 仲本桂子 (2024) 「ベジタリアン・ヴィーガンの栄養学」 鶴田静・垣本充・加藤裕子・仲本桂子・山形謙二・いけやれいこ・中川雅博・宮城智央・橋本晃一・高井明德『まるごと解説 ベジタリアン&ヴィーガンの世界』 福音社、pp.43-75
- 濱野佐代子 (2020) 「子どもの育ちにペットが与える影響」 濱野佐代子編『人とペットの心理学ーコンパニオンアニマルとの出会いから別れ』 北大路書房、pp.65-84
- 原田琢也・伊藤駿編 (2024) 『インクルーシブな教育と社会ーはじめて学ぶ人のための 15 章』 ミネルヴァ書房
- ファーガソン、パメラ (2023) 『ビーガン食の栄養ガイド』 井上太一訳、緑風出版
- 古瀬公博 (2022) 「倫理的消費をめぐる消費者間の相互作用ーヴィーガニズムに関する予備的調査の報告」『武蔵大学論集』第 69 巻第 2・3・4 号、pp.17-28
- 持丸由香・山本明子・石黒洋 (2023) 「名古屋大学生協におけるハラルメニュー提供の現状と給食における多様性対応への一考察」『総合保健体育科学』第 46 巻第 1 号、pp.60-67
- 森映子 (2023) 『ヴィーガン探訪ー肉も魚もハチミツも食べない生き方』 KADOKAWA
- 山ノ内裕子 (2022) 「学校給食の代わりに『コピー弁当』を作るということー食物アレルギーの子どもを持つ母親とムスリムの母親への調査から」『国際教育協力論集』第 25 巻第 1 号、pp.3-30
- 山ノ内裕子・四方利明 (2021) 「食マイノリティと多様性ー学校給食における食物アレルギーおよび宗教対応をめぐる」『関西大学人権問題研究室紀要』第 81 号、pp.29-50